

書評

ルチア・ドルチェ／松本郁代編

『儀礼の力——中世宗教の実践世界』

(法蔵館・二〇一〇年)

曾根 原 理

冒頭におかれた「刊行のことば」(川嶋将生)にある通り、本書は二〇〇六年九月に立命館大学アート・リサーチセンターにおいて開催された、同名のシンポジウムを基礎としている。「報告内容そのままではない」と記されるように、執筆者の中には改訂を施したり、新稿を作成された方もおり、シンポジウムのコーディネーターであった編者一名によって再編集されて出来上がっているという。目次は次のとおりである。

序 章 日本宗教研究における儀礼学の論点(ルチア・ドルチェ／松本郁代)

第I部 儀礼の実修

第一章 呪詛神の祭文と儀礼——「呪詛祭」の系譜といざ

なぎ流「すその祭文」をめぐる(斎藤英喜)

第二章 声明の美的表現力と権能——法華懺法の受容から(大内典)

第三章 夢想感得像——夢想による仏画・垂迹画の制作について(田中貴子)

第II部 儀礼的身体

第四章 密教儀礼と「念ずる力」——『宝鏡鈔』の批判的検討、および『受法用心集』の「髑髏本尊儀礼」を中心にして(彌永信美)

第五章 二元的原理の儀礼化——不動・愛染と力の秘像(ルチア・ドルチェ)

第III部 儀礼の社会・政治的力学

第六章 尼寺における生活を再考する——儀礼、信仰、社会生活の場としての中世の法華寺(ローリー・ミークス)

第七章 醍醐寺における祈雨の確立と清瀧神信仰(スティーブン・トレンソン)

第八章 神興入洛の儀礼と「洛中洛外」——南北朝期から室町期の山門噉訴をめぐる(松本郁代)

特論 儀礼と宗教テクスト——中世密教聖教の権能をめぐる(阿部泰郎)

あとがき(ルチア・ドルチェ／松本郁代)

評者は寡聞にして、シンポジウムや本書制作に向け、どの程度継続的に、問題意識と方法論を共有する機会が確保されたか

を知らない。一般的に論集では、共同研究期間などを経て内容的に噛み合ったものを作れるか、学問的な基盤を共有した集団が母体となるか等が、その水準を左右することがある。本書については、そうした経緯は不明であるが、活字化された結果から検討を試みたい。

二

まず方法論について考える。本書には、編者の連名で書かれた「序章」にやや詳しい記述がある。評者なりに理解するため、「従来の研究には××という問題点があり、本書では〇〇という方法でそれに対処した」という形の整理を試みることで検討を進めたいと考えた。編者たちは、「儀礼」をとりあげる意義について、序章第一節では欧米の研究史、第二節では日本の研究史を引きながら説明をしている。まず欧米の研究史の成果については、次のように受けとめているように読めた。

- ・ 儀礼は「宗教文化における不変の要素であり、根源的で普遍的な構造をもつ」と考えられてきたが、むしろ「ある目的をもち、ある状況に応じた活動」ととらえるべきである。
- ・ 儀礼は「形式主義や反復性、伝統へのこだわり」をもつ。
- ・ そのこと自体は認めた上で、それを「儀礼の本質的な特性」ととらえるのではなく、「意図的な工夫」として解釈すべきである。

・ 儀礼は「過去に生じた出来事を単に描いたり、繰り返した

りするもの」ではなく、何らかの「歴史的意義」をもち、「特定の文化や社会的文脈と関わらせながら分析」されるべきものである。

続く記述では、上記の観点から儀礼の「権能」に注目する。「権能」とはあまり見慣れない語であるが、辞書的には「ある物事をするのできる資格」といった意味で使われる。編者は「エンパワメント」とルビを振っているので、「権限を与えられること」という意味も加わっているかもしれない。儀礼の権能を把握する手段として挙げられているのは「実践、過程、遂行化、またはコミュニケーション、ディスコースの分析」であるが、本書一読後、とりわけ後二者に重点が置かれているように思われた。

編者によれば、儀礼を実践することで、儀礼自体や実践者の身体に変化が生まれ、「社会的な作用」を生み、「社会性」を作り出すという。また儀礼の遂行を中心として、儀礼そのもの、また周囲との間で様々な変化や関係性が生まれていくことについて、「力学」の語を用いる。本書のねらいは「儀礼を何らかの作用、解釈、再創造を生み出す力学を含みもった存在として捉え、儀礼の実践面に積極的な意味を見出そうとしたもの」とある。要するに、従来の儀礼研究を伝統にもとづき固定された形態を分析するものとみなし、そうではなく儀礼そのものや周囲との動態的変容を明らかにするという指向としてとらえられた。自身のことと恐縮だが、評者は近世の東照宮祭祀とその周辺

を研究対象としている。一九八〇年頃の研究状況を思うと、東照宮創設は権力の仕事にすぎない、社会の動きとは切り離されたものである、為政者の思いつきにすぎないといった議論がなお根強く残っていた。しかしその後の研究で、東照宮を祀ることの意味が、將軍個人、武家社会、民間の動向、その他社会の各方面と関連づけて論じられるようになっていく。本書が目指す方向も、おそらくは個別事例やテキストの内部に限定されていた儀礼研究を、同時代社会の中でもった意味まで広げて考えていこうとするものと評者は受けとめた。

そうした研究の方向性は適正なものであると思う。しかし評者が思うに、欧米の儀礼理論として紹介される主張は、歴史的事象の同時代的な意味を問い続けてきた思想史学の立場（村岡典嗣の「認識されたものの再認識」など）からみれば、それ自体は目新しくもない。また、儀礼を動態的にとらえ同時代社会の中に位置づけようとする試みも、後述するように、日本中世宗教研究に限定しなければ、決して日本の学界に見られなかったわけではないように思われた。

三

序章は欧米の儀礼研究を紹介した後、日本の宗教儀礼研究について分析し批判を行っている。編者はまず①人類学・文化人類学、②宗教学、③歴史学の一般的動向を取り上げ、①は現在進行中の儀礼を対象とし、歴史上の儀礼は取り上げない点から、

本書の立場では不十分としている。②は教理研究を主とする点を批判する。儀礼をめぐる「力学」的關係を扱わないのは不十分というのであろう。③への批判は評者には難解であった。編者は「政治的なイデオロギーや支配被支配関係に規定されたなかで論じられている」点を不十分と批判するのだが、同時代の社会でイデオロギーや支配被支配関係が機能している以上、儀礼の「権能」を追究するならば、それらに関わらない方が逆に不自然ではないのだろうか。

編者は①③をまとめて、欧米における儀礼研究は儀礼から生じる現象を広く文化や社会との相互関係によって理解する、日本は儀礼をめぐる文化や社会を主な分析対象とする、と概括する。だが、「相互関係」の有無というのは程度の問題であるようにも思われる。基準としての分かりにくさを感じるのは、評者だけだろうか。

編者は続いて、本書の主な研究対象である日本中世の仏教儀礼研究に特化して、研究史を批判する。まず佐藤道子氏の法会研究に触れ、法会自体の変化と歴史的な展開を明らかにした点を、「力学的に考察したもの」と評価する。次に、東白両密の儀礼研究については、編者が目指す儀礼研究の基礎であるとする。「力学」考察には至らないということであろう。歴史学の儀礼研究については、「歴史的固有性やテキスト論のなかに儀礼を位置づけるだけ」にとどまり、「儀礼行為から生まれる現象を、デイスコースやコミュニケーションとして読み解く」点

が不十分と批判する。聖教調査の成果にも触れ、「仏教儀礼が資料として提供されることになった」と評価するが、目指すべき儀礼研究そのものではないとも読める。それに対し、芸能や文学、神道思想などの研究については、「儀礼の力学的問題にも発展する可能性を孕んでいる」等、目指すべき儀礼研究との親和性を窺わせる。特に習合思想の研究については、「祭祀儀礼の力学的問題」の例として高く評価している。

近年の日本における研究史の評価を一覧することによって、編者の立場が多少分り易くなったように思われる。基礎的な教学研究や聖教調査は、それ自体の重要性は認めるものの、目指すべき儀礼研究とは距離があるとする。一方、儀礼の力学が働きやすい分野として、芸能、文芸、作法、思想などが挙げられている。歴史学の現状への批判とあわせると、編者が目指す儀礼研究の中心は、「デイスコースやコミュニケーション」の分析が可能かつ有効な分野であると考えられる。

評者が思うに、日本の宗教研究の中で「デイスコースやコミュニケーション」の調査や分析を試みてきたのが思想史学である。本書で説かれた方法論について、思想史学はもともと親和的な学問分野であろう。渡辺浩氏が、近世の社会に無数の儀礼と象徴が張り巡らされたことを明示したように（「御威光と象徴」一九八六年）、宗教儀礼をめぐる「力学」は、既にさまざまな研究成果に現れている。そうした意味で、編者の意図は理解されるが、全く新たな試みというわけではない。また、

聖教調査等を基礎とするなど、従来の研究蓄積を否定するのはなく、活用していく側面を指向していると思われた。

四

具体的に、収録された論考について見ていきたい。

斎藤論文は、高知県に伝わる「いざなぎ流」の祭礼において読まれる「すその祭文」を対象とする。列島各地に広がりを見せた呪詛系祭文（呪いの人々から隔離することで災いを防ぐ）を示した上で、いざなぎ流「すその祭文」において「りかん（読み分け）」と呼ばれるアドリブが有効に機能していたこと等を論じている。特に先行研究を批判する形態はとらず、呪術的テキストが儀礼の実践の中で変容を遂げるさまを描きだしている。

大内論文は、法華懺法という仏教儀礼を対象とし、『法華経』読誦などの行為が「声を仏事となす」という思想——声明は仏道成就を導く——で理解されていたことを論じる。さらに、声明実唱の持つわざとしての性格（文字や記号で記録できない要素が重要）から、美的権威と宗教的権威が実唱者の中で一体化したことを導き出す。特に先行研究を批判する形態はとらず、時代的変遷について整理するというよりは、発展段階を描き出すところに重点があるように見える。

田中論文は、夢想やその類の体験にもとづき描かれた神仏の画像を「夢想感得像」と名づけ、説話の媒介の有無に分けて整理・分析している。結論として、「夢想感得像」は儀軌（仏画

作成の典拠となる経論〕によらない異形像がほとんどであること、受容者が仏者の場合伝播に広がりが見られるが、貴族の場合には限定し神秘化を図る傾向のみられること、などを論じている。特に先行研究を批判する形態はとらないが、代わりに夢想と神仏の顕現を儀礼として考えるスタンスを提唱する。

彌永論文は、心定『受法用心集』に収められる「鬻體本尊儀礼」の記述を扱い、そこに見られる強い身体性に言及し、インドや中国と比較して日本の密教には「念ずる力」「思い」「情念」がより大きい意味を持ったのではないかと主張する。特に先行研究を批判する形態をとらない一方で、論じた内容の背後にあるものとして「生身」の理念や天台本覚思想を示唆する点は大内論文やドルチェ論文と通底する。

ドルチェ論文は、日蓮自筆草稿に見られる不動と愛染の各明王の図を発端とし、非正統的尊容の持つ意味や背景などに触れたのち、「悟りを体現する形態が、つねに新たなイメージとなり、また、二元性の超越を志向する言説が常に更新されていった」ことを論じる。また、図像の変化・多様化は必ずしも単独で起きるのではなく、儀礼そのものの変化と連動しつつ行われていたことを主張している。特に先行研究を批判する形態をとらないが、自らの論考を補完し一歩進める位置づけにある。

ミークス論文は、尼寺（特に中世の法華寺）における日常生活や儀式に目を向けることで、尼たちが僧と同じように寺院管理や信者との交流を行っていたこと、儀式の担い手として（さ

らに光明皇后の長い伝統を継ぐ者として）誇りを持つて生きていたことを論じている。梵網会の儀礼分析などを通じ、男性の手になる教義書にもとづき尼を恠しく惨めな存在とみなしがちだった先行研究を批判している。

トレンソン論文は、中世の醍醐寺僧における祈雨儀礼を分析対象とし、十二世紀前期の定海に至る変遷、および同寺鎮守の清瀧神信仰が関わっていくプロセスを論じている。そうした歴史的事実の考察に加え、事実を覆い隠す形で祈雨儀礼や清瀧権現に関する伝承が創作されていき「真言宗祈雨法の歴史像を歪曲させる」様子などを説いている。祈雨儀礼に関する従来説の非整合性解決を目指し、歴史的事実のみならず思想や言説レベルでの推移や展開に言及している。

松本論文は、中世の延暦寺が朝廷に対する要求のため、鎮守神山王社の神輿を奉じて上洛した「山門嗾訴」について、「神を主体とした儀礼行為」ととらえて、「儀礼的神事の実態」や「社会的影響の範囲」について論じる。松本氏によれば、通常と異なる状態の神（神輿に乗り上洛）を住民が受け入れて臨時の社会的共同体が形成される以上、それも儀礼と把握できるといふ。そして嗾訴にあたっては、常に「先例」が強く意識されていたにもかかわらず、それは法制化されず、「事例を繰り返すことにより、次に必要となる新しい儀礼を生みだすためのステップとしての側面を強くもつ」ものであったとする。特に先行研究を批判する形態をとらない一方、本書の儀礼の理論を強

調している。

阿部特論は、他の論考とはスタイルを異にし、自らが展開してきた仁和寺、真福寺などの聖教調査の成果のみを列挙する。序論で指摘されたとおり、聖教調査が新たな儀礼研究の基礎となり得ることを示しているものの、内容自体は阿部氏の業績をまとめたもので新味はない。

以上、本書の各論文を通覧して感じるのは、目指す方向はともかく、個々の方法論や問題意識は必ずしも一致していないということである。当然といえば当然ながら、新たな儀礼研究の立場を強く意識した論考もあれば、その基礎段階にとどまっている論考もある。ここではそれを、「のびしろ」が大きいととらえておきたい。

もう一つ気になったのは、必ずしも先行研究との対決が明確ではない点である。従来の研究史とは観点が異なるのだから当然と言えるかもしれない。しかし一方で、「そうも考えられるが、こうも考えられる」で終わってしまうのではないかと危惧される。新たな観点や方法論の重要性は認めた上で、しかし最終的に何を変えられるかが重要だと考える。

五

もはや大昔の話になるが、歴史は整然と、法則に従って発展すると信じられていた頃があった。そうした大きな物語、一元的・予定調和的な展開という観念は近年まったく信者を失い、

代わって偶然的な要素が注目を集めている。源平合戦で源氏が勝ったのも、西洋文明が世界を支配したのも、必然とは見なされなくなってきた。そうした中で、一見非合理で不可思議な力——パフォーマンズやシンボルなど——の意味の問い直しが始まった。人間存在が「受肉せる主体」として不可知な存在であることの認識を始点として、従来の学問体系の見直しが進められている。本書に示された儀礼研究も、その大きな流れの中の一つであろう。それだけに、一時の流行を超えるものが望まれる。

百年以上前の話だが、夏目漱石は朝日新聞社に入社するに際し「新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である」と述べたという（斎藤孝『昭和史学ノート』）。そして今、国立大学法人化を一つの画期として、「大学屋」さんたちは益々経営に精を出す必要が出てきた。「商品」の差別化を図る中で、国際、学際、情報などのキーワードが幅をきかせる状況が生まれている。異分野との交流を図るあまり、借り物競走の観を呈し、自己の存立基盤が問われるような分野も出てきている中で（中世文学会編『中世文学研究は日本文化を解明できるか』）、それを生かすか殺すか、研究者の側にかかっている面も少なくない。本書はそうした時代性のもとで生まれたのであり、本書自体がどのような「権能」を著者たちに、そして周囲に示すかが問われているのである。

（東北大学助教）